岡山理科大学紀要　第59号 B pp. 1-6 (2023)

武田泰淳「聖女俠女」論

―戦時上海のプリズム―

荻原　桂子

岡山理科大学教育学部中等教育学科

（二〇二三年十月三一日受付、二〇二三年十二月四日受理）

一．はじめに

武田泰淳（一九一二―一九七六）は、戦後派を代表する作家の一人である。大島泰信の二男で幼名は覚といったが、泰信の師僧で武田芳淳と父との約束があり、芳淳の遺言により武田姓を継ぐ。父方も母方も僧侶の家系で、伯父渡辺海旭は西光寺の住職をつとめた高名な仏教学者であった。一九三一年、得度し、四月東京帝国大学支那文学学科へ入学、同級に竹内好がいた。浄土宗から度牒を授かり、泰淳と改名する。左翼運動によって検挙後、東京帝国大学を中退した。一九三三年、僧侶の資格をとり、長泉院、西光寺などで僧侶をつとめる。翌年、竹内好を中心として漢学ではなく現代中国文学の研究を目的とする中国文学研究会が発足し、同人となった。

翌年、中国文学研究会機関誌『中国文学月報』（のちに『中国文学』）を創刊した。同年、「謝冰瑩事件」[1]で目黒警察署に四五日間拘留され、その後、左翼運動から離れる。一九三七年一〇月召集令状を受け、近衛師団近衛歩兵第一旅団近衛歩兵第二聯隊の補充兵として入隊、上海派遣軍の二等兵として上海に派遣される。翌年徐州会戦に参加、さらに翌年一〇月、招集解除された。

一九四三年三月、『中国文学』が九二号で廃刊となり、四月、書き下ろしで『司馬遷』を日本評論社から刊行した。翌年六月、上海に渡り中日文化協会附属東方文化編訳館に就職し、同協会にいた石上玄一郎を知る。同年一一月、協会理事長小竹文夫の代理として、南京で開かれた大東亜文学者大会に出席した。一九四五年三月、国際文化振興会上海支社に赴任してきた堀田善衛を知り、草野心平に招かれ南京で遊ぶ。同年八月、上海で終戦を迎え、虹口の日僑集中地区へ収容、俘虜管理所での生活が始まる。

一九四六年二月、上海を出港し、鹿児島に引き上げる。西光寺と潮江院の兼務住職になり、七月「才子佳人」を発表する。翌年六月、北海道帝国大学法文学部講師となり、「蝮のすえ」を連載、週二回「支那文学史概説」を講義する。同年一一月短編集『才子佳人』を刊行する。一九四八年五月「聖女俠女」を『思潮』一〇号に発表する。一九五四年三月、難破船長人喰事件を取材した「ひかりごけ」を『新潮』に発表、同年三月から六月に『武田泰淳作品集』四巻を講談社から刊行した。一九七一年六月には『武田泰淳全集』全一五巻別巻一の刊行が始まる（一九七三年三月完結）。一九七三年三月、堀田善衛と『対話　私はもう中国を語らない』を刊行する。一九七六年上海を回顧する「上海の螢」を発表するが、シリーズとなるはずだった自伝は一編をのこして未完となる。同年一〇月五日午前一時半、逝去する。遺稿集『上海の螢』（中央公論社）は、「武田泰淳が長年、中国に抱いていた深い愛情と止みがたいノスタルジアが全篇に滲んでいる」[2]ものだった。一九七八年一月には『武田泰淳全集』増補版全一八巻別巻三が刊行された（一九八〇年三月完結）。

武田泰淳は、生涯に五回中国を体験している。一回目は、一九三七年一〇月一六日から一九三九年一〇月一日まで、一兵士として上海、嘉興、湖州、杭州、南京、廬州、徐州、武昌、南昌、九江などを廻った。二回目は、一九四四年六月から一九四六年二月まで上海に滞在して、上海で敗戦を迎えた。三回目は、一九六一年一一月一八日から一二月四日まで、中国対外文化協会の招いた日本文学代表団の一員として椎名麟三、中村

光夫、堀田善衛と一緒に広州、北京、洛陽、西安、重慶、上海、杭州と廻った。四回目は、一九六四年三月に中国作家協会、中国人民対外協会の招きで大岡昇平、亀井勝一郎、由起しげ子と北京、西安、上海などを廻った。五回目は、一九六七年四月一三日から五月七日まで、中国作家協会の招きで杉森久英、尾崎秀樹、永井路子と一緒に北京、西安、上海、杭州、長沙などを廻った。紹興では、『秋風秋雨人を愁殺す　秋瑾女士伝』のモデル秋瑾の遺跡を訪ねている。

武田泰淳の作中では「女性たちが強烈な魅力を放っている」[3]といわれるように、揚子江に何度も立った武田泰淳は、上海を舞台にさまざまな女性を描き出した。秋瑾伝の秋瑾は実在の人物であり、西湖のほとりに立つ白亜の巨大な秋瑾像は圧倒的な迫力だが、武田泰淳の描く秋瑾には、独特なノスタルジアが異彩を放っている。女性革命家秋瑾（一八七五―一九〇七）が生きた清朝末期の動乱は凄まじく、日本留学から帰国して辛亥革命に身を投じた異国の未見の女性に捧げた白眉の評伝といえる。著書口絵の秋瑾は処刑前後の獄衣姿の悲壮な姿ではなく日本髪、和服で日本刀を構えた日本留学当時の若々しい姿を日本の読者に刻印している。

時代は降って、戦時上海に一人の日本人女性が登場する。武田泰淳が描く室伏クララである。中国を愛して絶えない武田泰淳は、やはり中国を愛して止まない二二歳の若き日本人女性を日中戦争という動乱のなかで生き抜いた姿を同時代に生きた証として自作に蘇らせることになる。

二．室伏クララについて

室伏クララ（一九一八―一九四七）は、リベラル派の評論家室伏高信（一八九二―一九七〇）の長女である。室伏高信は父として娘の死後、その短い生涯をエッセイ「クララのこと」（『人生逍遥』）に綴っている。

八つの年から、彼女の父親は放浪生活をはじめ、彼女と、その二人の妹と、母親とを残して、再びその家庭にかへってはゆかなかった。三十五歳の時から孤独を守りつづけ、若い未亡人のやうにして生活してゐる、美貌で貞淑な母親が、一層不幸であるか、或は幼い時から父親なしで、ひそかに小さい胸をいためて来たクララと、その二人の妹とが、一層に不幸であるか。[4]

『改造』『日本評論』といった日本を代表する総合雑誌の主筆を歴任したジャーナリストである室伏高信はクララ誕生後、八年にして出奔した。妹エミヤと並び神奈川県藤沢市鵠沼の林を背景に写した和装のクララは一二歳前後であり、一〇年後の上海で撮られた『大陸新報』（一九四〇年一一月七日）の写真とは印象が全く違う。思春期の室伏クララは四年前の父親の失踪の暗い影を背負っているかのように表情が重く曇っている。ほっそりした体型は変わらず、日本語新聞の紙面という公共性もあってか、国策宣伝という立場をわきまえサービスショットの笑顔満面で応えている。スナップ写真の記事には「上海は堅実　南京政庁に咲く大和撫子　室伏クララさんの弁」という見出しがついている[5]。

國民政府宣伝部の一員として去る二日渡支早々若き身を戦後の日支文化提携のため活躍、首都南京政庁に咲いた名花一輪として人気をさらってゐる情熱の評論家室伏高信氏の令嬢クララさん（二二）が六日ひよつこり来滬した／彼女は東京女子大学在学中に父室伏高信氏の情熱に培はれて新生支那への強い憧れを持ち「大陸に骨を埋めても…」とまで真剣な決意を固めて父を口説くこと一年余、漸く許しを得て父室伏高信氏の親友の國民政府宣伝部長林怕生氏に宛てた〝娘クララを日支文化のために働かして下さい…〟との書簡を一本携えて単身支那海を渡つて去る一日南京に着いたのである／クララさんはアスターハウスで紫の支那服に若鮎のやうなピチピチした身体を包んで次の如く語つた／「船に乗って初めて日本の地を離れた時には一寸センチになりましたわ、東京で北京語を勉強して来たんですけれど、所によって言葉が違ふんで困ってゐます南京の宣伝部は広東語が主ですから私は何が何だか見当がつかなくてマゴマゴしてゐる所です、上海は東京で考へてゐた程派手ぢやないんですね殊に居留民の真面目なのには心から敬服しました」

クララという当時の日本人女性に珍しい名前は、父親が社会主義系のドイツ人女性解放運動家クララ・ツェトキンにちなんだという（『椰子』育成社弘道閣、一九四二年一月）が背負わなければならないものが多い命名ではなかっただろうか。室伏クララが、諸星あきこのペンネームで翻訳した謝冰瑩（一九〇六―二〇〇〇）の『女兵士の自伝』（青年書房、一九三九年二月）巻末広告文は実名で「支那の女性、社会、風俗、習慣等への関心を深めていたゞきたい」とある。また、周希瑜は「室伏クララは明らかに父の室伏孝信と違い、空洞化していた発言ではなく、より実際的な翻訳を通して日中関係の相違を理解しようとする態度を表明しているのだろう」[6]と指摘している。

同年代の中国人女性作家の描くヒロイン像に国籍は違っても共通する女性の生き方をみたに違いない。謝冰瑩は、湖南省出身で、革命思想に目覚め、武漢の中央軍事政治学校に入学し、女性部隊に配属されて北伐に参加した際の「従軍日記」が林語堂によって英訳され世間に知られた。部隊解散後故郷に帰って結婚を拒否、家出を三度するが失敗し、監禁さ

れ結婚するが夫に離婚を承諾させた顛末が「一個女兵的自伝」（一九三六年）である。中国語を習い始めてから一年後の室伏クララは、出版されたばかりの現代中国文学の日本語への翻訳をはたしている。謝冰瑩は、一九三一年には日本留学の経験もあり、一九三五年には再来日して早稲田大学に学び、竹内好や武田泰淳とも交流している。一九七三年からサンフランシスコに定住し、二〇〇〇年に同地で病没している。

一九四〇年、室伏クララは二二歳で父の友人である草野心平を頼って中国に渡った。当時草野心平は、汪精衛「南京政府」の宣伝部の顧問をしていた関係で、室伏クララは南京政府の宣伝部部長であった林柏生のもとで宣伝部員として南京で働きながら、林の妻や娘に日本語を教えた。一九四二年一月ごろ上海に移った理由として、熊文莉は「この上海行きはクララの中国文学志向と深く関わっていると思われる。南京は当時、完全に日本の支配下にあり、日本側に協力するごく少数の「漢奸」文人以外、中国人の作家がほとんどいなかった。南京に対し、上海の状況は全く違う。当時の上海文壇は孤島文学の時期にあたる」[7]と述べている。日本語新聞『大陸新報』一九四四年六月二〇日、東亜同文書院の英文学教授である若江得行の「愛愛玲記」というエッセイが載っている。

健康無類の女士の新作に注目してゐる人は、私のやうな英文学徒ばかりでなく、北京大学支那文学出身の日本の学徒の中にも有り、怕らく、予且氏の作品に注目してゐる人の中にも有る筈である。中国の新しい雑誌は、中国の人等と同じ和の日本人に読まれる日は既に来てゐる。黙つて愛読してゐる……日本の読者も沢山居るのだ。新刊雑誌が出る度毎に目の色を変へて街頭を馳駆する日本人が居るのだと云ふ事を、是非御了解願ひ度い。

陸の孤島と呼ばれた上海で開花した張愛玲の作品「燼余録」（一九四四年二月月刊『天地』掲載、同年一二月『流言』収録）を、室伏クララは一九四四年六月二〇日から二八日にかけて七回『大陸新報』に連載している。室伏クララが、渡中した一九四〇年代は、日中戦争のただ中であった。父室伏高信は、二二歳の娘を一人旅立たせることは不安であった。

彼女が上海に出かけたのは、三年前の十月であつた。まだ二十二歳の若さでもあるし、肋膜を疾んでゐるうへに、蒲柳の質である彼女を、気候も悪く、また一種の暗黒面をもつてゐるこの世界都市に、一人で出してやるのは、たしかに一つの冒険であるとは思つたが、彼女がたつての希望であるので、彼女の希望にそふことにしたのであつた。[8]

室伏高信は一九三六年、読売新聞の特配員として中国に渡り、胡適などの中国文人と知り合いになっていた。胡適との公開往復書簡として、胡適「日本国民に告ぐ」（『日本評論』一九三五年一一月一日）、室伏高信「胡適之に答ふる書」（『日本評論』一九三五年一二月一日）、胡適「室伏高信先生に答える」（『日本評論』一九三六年一月一日）、室伏高信「再び胡適之に答ふる書」（『日本評論』一九三六年二月一日）、室伏高信「胡適再見記」（『読売新聞』一九三六年七月二三日）がある。室伏高信は、「貴国の統一を望みます。（中略）私達は中国人がどのように考へ、中国がどのような方向に向ひつゝあるかを知つておくだけで十分である。そして外部からの分裂政策が却つて民族統一の逆効果を示すものだといふことの不朽の真理を」[9]と胡適に真意を吐露している。内地の誰よりも中国の現状を知り尽くしていた室伏高信にとって、娘クララを戦時上海に送り出すには相当の覚悟があったにちがいない。

その頃彼女は恋愛をおぼえてゐたやうであつた。支那語をおしへてゐた何がしといふ先生と恋仲になり、しょつちゅうその人と行ききをしてゐたらしいのである。その先生には夫人があつて、望ましいことではないのはもちろんである。[10]

室伏高信は、自分自身が三回の恋愛から妻子を棄てて出奔した経験があり、恋愛関係のもつれから東京を離れたいという娘の希望を受け入れざるをえなかったのかもしれない。ただ、聡明な父譲りの頭脳をもった娘に、父は一縷の望みをもったのかもしれない。室伏クララの翻訳活動は、父である室伏高信ができなかった中国人（女性）への連帯感や中国文化への深い理解を示すことができた。男性である室伏高信と同様、中国人女性の表象に並々ならぬ固執をし続けた作家武田泰淳の室伏クララ像について考察する。

三．「聖女侠女」のマリヤ

武田泰淳は「彼独特の〈女性〉という〈他者〉に対して抱く根源的な感覚」[11]をもって、〈中国もの〉に女性を描き続けた。室伏クララが上海で逝去した翌年の一九四八年、雑誌『思潮』に発表された。一九四九年一月、臼井書房から発行された『月光都市』に収録された「聖女侠女」には、室伏クララが「聖女」マリヤとして描き出されることになる。「私ははじめのうち、マリヤさんを馬鹿にしていた」と冒頭で語り出すのは、梅女士と呼ばれる「侠女」である。武田泰淳は、男性視点ではなく、女性の視点からの女語りで、室伏クララという希有の女性文学者を冷徹に描き出す。若い女性に対して男語りだと甘くなる危険を避けるかのように徹頭徹尾女語りの立場を貫いてマリヤを描いている。

「マグダラのマリヤはキリスト一人を男の中の男として信じたという話だけれど、上海のマリヤさんはあらゆる男を信じていた」のである。

中国人とも、中年男とも、軍人とも、商人とも、同棲しては別れ、別れるとすぐ住みかえる。防ぎもせず、守りもせず、荒だてもせず、考えをめぐらすでもなく、何の気なしに身体をまかせてしまう。

私（梅女士）は侠女として「やることはやってのけて死ぬ」のに対して、マリヤは聖女として「愛せるだけ愛して死ぬ」という運命を受け入れている。武田泰淳のマリヤへの救いようのない凄惨なイメージはどこからくるのだろうか。「マリヤさんのお父さんは、あの有名なクリスチャン、欧米を漫游した自由主義の紳士、私の弟なんかが殺してもあき足りないと憤慨していた、文明人」と言われることや作品中でマリヤの雑誌に発表した「私の骨が椅子によりかかっている、そのかたち」という詩は実際の室伏クララの一九四四年『亜細亜』第二号に掲載された詩であることからも、マリヤが室伏クララをモデルとしていることが誰にもわかる。室伏高信自身が、上海の娘クララに対して苦渋の心情を吐露している。

彼女に会ったのは、手紙をうけとってから一週間後のある日、第一ホテルのサロンにおいてであった。見違へるほど彼女はふけてゐた。数へて見ると、彼女は二十五歳になってゐる。もう立派に一人前の女になってゐるわけであり、彼女の荒んだ生活ぶりは、かねて耳にしてゐるところであるし、またその噂が真実であるに相違ないのである。[12]

父の目から見ても死の二年前の室伏クララは異常な肢体をさらしていた。武田泰淳は作品のなかで侠女である私にマリヤを毒づかせている。

マリヤの衰弱にはたしかに異常な点が見えた。それを私はだらしがないと舌打ちし、不潔だと眉をひそめたが、その日の彼女の白痴のように投げやりな挙動で、「この娘も、もう永いことないんじゃないかな。あっけなく、ダメになってしまって」と見きりをつけ、あわれみと軽蔑を感ぜずにはいられなかった。

マリヤを「ニヒリズムの幽霊」と呼ぶ男たちのなかで、私は「焼きつくような憎悪にかられ」るが、戦時上海にあって占領側の日本人でありながら、中国を愛して止まないマリヤは、幽霊となって生きるしかないのである。「ニヒリズムの幽霊」として生きているのは、マリヤだけではない。武田泰淳自身が日本人として中国に生きることに、自己嫌悪と憎悪の感情を内在していたといえる。

そして、終戦をむかえることになる。「終戦後の上海について私はあまり語りたくない。」と本音が吐かれ、「あのおそろしい虚脱状態の真夜中におかれた時、男たちの自信や勇気や知慧が、どんなにはかなく四散してしまったか」というのである。「マリヤさんは虹口の南のはずれで岸という恋人と同棲しているというわさ」があって、「岸という大使館員は、私のふれたくない日僑の醜悪さを一番豊富に持っている男」として登場する。「べっ甲色のロイド眼鏡をかけ、小さな、黒い顔をして、海軍の宣伝でいい顔になり、えばりちらしていたくせに、終戦後二月にならなぬうち、重慶側の対日工作の機関に入り、自称民主主義に早がわりしたような男」は武田泰淳自身を含めた敗戦後の男たちの表象であるといえる。そんな男に対して、マリヤは「男はみんな神様なのよ」と哀訴する。私は「岸をいじめないで」と哀願するマリヤに対して、私は言葉を失う。

岸や、そのほかの男たち、マリヤさんをこんにしてしまい、ふりむきもしない上海在住の日本の男たちが、殺しても飽き足りなかった。だが、その腹だたしさ、イヤらしさの粘液の中に、一脈の悲しみの清水が、今まで感じたことのない澄んで光る悲しみの流れが、少しずつ流れはじめるような気もした。

「死にかかったマリヤさんの、しなびはてた身体から、野心のみちた強壮な私の身体へと、水のようにしみわたって来た」ものは、マリヤという女の真実であったということがわかる。「女というもんは、わるい奴だから」という台詞は、聖女マリヤによって昇華されたといえる。

四．おわりに

武田泰淳がエッセイで「作家は、まず自分を書き、自分以外の人間を書かねばならないが、この二つの事業は、女を書くことによってはたされる。何故ならば、女は女自身、すべての悪なるもの、善なるもの、人間的なるものであり、また、それを呼びさますものだからである」[13]と書いたことについて、高崎俊夫は、「女が書きたい」という作家の願いは『淫女と豪傑　武田泰淳中国小説集』において「理想的な形で実現されている」[14]と指摘する。中国人秋瑾や日本人室伏クララといった実在の女をモデルにした中国小説は時代や空間を超えて、武田泰淳の中国を読者に鮮烈に刻印する。

戦後も上海に留まり一九四七年に肺結核で逝去したクララの遺品から父が掲載した未完の遺作「あきこはあきこひとりの死を死ぬ」（『青年』一九四八年五月）は、「聖女侠女」のマリヤの死と重なる。詩の「台所に生えた菌のように哀れな形態をしているのが今のあきこの実際の姿なのだ、何処へ、と言って行くところもなく、また行けるとも思わず行こうとも考えない」はマリヤの魂魄と重なる。武田泰淳にとって、「女を書く」

ことは、他者という概念を表象することであった。

武田泰淳は「女について」で、「殺人犯ラスコルニコフにとって、売春婦ソーニャは救いであった」[15]と書いた。ドストエフスキーが『罪と罰』で描いたソーニャの聖女性と娼婦性は、死か狂気か宗教かという「三つの道」を示すだけはなく、宗教の道を切り開くためには「いっそ淫蕩に身をゆだねて、理性を麻痺させ、心を石にかえてしまうことだ」という最後の「救い」を開示した。「聖女侠女」のマリヤはまさに「心を石にかえてしまう」までに心身ともに衰弱してしまう。武田泰淳が描こうとした女は、聖女性と娼婦性を兼ね備えたソーニャのような存在だったのである。

「女というものは……」私は、私の方へふりむけられるであろうマリヤさんの、みじめな顔、あまりに邪気がないためにかえってゾッとする顔を意識しながら、ドアのハンドルに手をかける。

作品の最後でマリヤと室伏クララの死が重なる。死の数時間前に書いたという娘の手紙に同封された二枚の写真をみる父室伏高信の姿は痛ましい。戦時中国への渡航に不安を抱きながら室伏高信は「一種の暗黒面もっているこの世界都市」上海に娘を送り出した。南京政府に雇われて、林柏生のもとで宣伝部員として働いていた室伏クララのまわりはさまざまな日中の文化人との交流が生まれた。武田泰淳は、室伏クララの最期を作品に書き留めたことで、国策宣伝として存在し無惨に葬り去られた一人の女を聖女として昇華したのである。

注

1 一九三五年に武田が左翼活動から離れる契機となる「謝冰瑩事件」が起こる。謝冰瑩は北伐に参加した女性兵士であり、『従軍日記』（一九二七年）を書いた作家である。武田は「中国文学研究会」の活動を通して知り合った。武田は、反日分子として溥儀暗殺の嫌疑を受けていた謝冰瑩のアパートの世話や、日本語と中国語の交換教授をおこなっていたため、同胞でないかと疑われ、勾留された。武田は「謝冰瑩女士の事件は、二十四歳の私にかなりの影響をあたえた。私にはその事件以来、すこぶる用心ぶかくもなり、如何なる行為をなす場合にも、いちおう疑ってからとりかかるようになった。利口になったかわりには、無邪気さを失った」（「謝冰瑩事件」一九四七年）と述べた。

2 高崎俊夫「編者あとがき」『武田泰淳中国小説集　淫女と豪傑』中公文庫、二〇一三年、二四九頁。

3 高崎俊夫　同掲書、二五〇頁。

4 室伏高信「クララのこと」『追放記―人生逍遥』第四書房、一九五〇年、九九頁。

5 邦字新聞『大陸新報』一九四〇年一一月七日。

6 周希瑜「日本占領下の中国における室伏クララの翻訳活動」『中国研究月報』第七七巻第二号、二〇二三年二月、二八頁。

7 熊文莉「上海における室伏クララ像―「聖女侠女」と「予定時間」に関する一考察―」『朝日大学一般教育紀要』三五巻、二〇〇九年、六五頁。

8 室伏高信「クララのこと」前掲書、九四頁。

9 胡適・室伏高信「胡適と室伏高信の公開往復書簡」張競・村田雄二郎『日中の１２０年　文芸・評論作品選２　敵か友か　１９２５―１９３６』岩波書店、二〇一六年、二六七頁。

10 室伏高信「クララのこと」前掲書、九五頁。

11 高崎俊夫　前掲書、二五一頁。

12 室伏高信　前掲書、一〇〇頁

13 武田泰淳「女について」『武田泰淳全集　第十二巻』筑摩書房、一九七二年、一一一頁。

14 高崎俊夫　前掲書、二五五頁。

15 武田泰淳　前掲書、一一三頁。

参考文献

（1）武田泰淳：武田泰淳全集　第一巻，筑摩書房（一九七一年）
（2）武田泰淳：司馬遷　史記の世界，講談社（一九七二年）
（3）武田泰淳：上海の螢，中央公論社（一九七六年）
（4）芝崎厚士：近代日本と国際文化交流―国際文化振興会の創設と展開，有信堂高文社（一九九九年）
（5）四方田犬彦編：李香蘭と東アジア，東京大学出版会（二〇〇一年）
（6）川西政明：武田泰淳伝，講談社（二〇〇五年）
（7）大橋毅彦他編：上海 1944―1945 武田泰淳『上海の螢』注釈，双文社出版（二〇〇八年）
（8）紅野健介編：堀田善衛上海日記　滬上天下一九四五，集英社（二〇〇八年）
（9）武田泰淳：上海の螢・審判，小学館（二〇一六年）
（10）大橋毅彦：昭和文学の上海体験，勉誠出版（二〇一七年）

＊武田泰淳年譜は、古林尚作成「年譜」（『司馬遷　史記の世界』講談社学芸文庫、一九九七年）、「武田泰淳年譜」（『秋風秋雨人を愁殺す　秋瑾女士伝』ちくま学芸文庫、二〇一四年）を参照した。

＊武田泰淳「聖女侠女」の本文は『武田泰淳全集　第一巻』筑摩書房に拠った。

On Takeda Taijun's "Seijo Kyōjo"

－A Prism of Wartime Shanghai－

Keiko OGIHARA

Department of Secondary Education, Faculty of Education
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 31, 2023; accepted December 4, 2023)

Takeda Taijun (1912-1976) was one of the leading writers of the First Postwar School. His childhood name is Satoru, and he became Takeda Taijun due to a long-standing promise he made to his father, Oshima Yasunobu's teacher, Takeda Taijun. Both his father and mother came from a family of monks, and his uncle Watanabe Kaigyoku was a renowned Buddhist scholar who served as the abbot of Saikōji Temple. Murobuse Kurara (1918-1947) was the eldest daughter of the liberal critic Murobuse Takanobu (1892-1970), who wrote about her short life after her death in his essay *Jinsei Shōyō*. Takeda Taijun continued to depict women in "Chinese things" with "his unique and fundamental sense of 'otherness' as women.'" In 1948, the year after Murobuse Kurara passed away in Shanghai, it was published in the magazine *Shichō*. After the war, he remained in Shanghai and died of pulmonary tuberculosis in 1947, and her father, Murobuse Takanobu, published her unfinished posthumous work "Akiko wa Akiko hitori shinu" (*Seinen*, May 1948). Having read her poem, Takeda compared her to the Virgin Mary in *Seijo Kyōjo*. In the poem, "Akiko's actual form is now in a pitiful form, like the fungus that grows in the kitchen, and there is nowhere to go, and she does not think that she can go again."

Keywords: Takeda Taijun; Murobuse Kurara; Qiu Jin; Wartime Shanghai.